

学校の概要(平成15年4月現在)

学校名	富士宮市立富士宮第四中学校					
学 年	1 年	2 年	3 年	特殊学級	計	教員数
学級数	5	6	6	0	17	30
生徒数	191	205	222	0	618	

研究の概要

1. 研究主題

「生き生きと意欲的に学び続ける生徒の育成」
 成就感を味わい、自己効力感が高まる指導と評価の一体化

2. 内容と方法

(1) 実施学年・教科

全学年全教科

研究主題である「学び続ける生徒の育成」には、まず、全ての授業のそれぞれの教材が持つ価値を、生徒が確実に身につけていくことが必要と考えた。そして、それを基盤に学び方を知り、自らを高めようとする意欲につなげ、学び続け、確かな学力の定着となることを目指そうと考えた。そのため、研究主題のもと、全ての教科が研究を進めることとした。

(2) 年次ごとの計画

平成14年度	<p>テーマ 「生き生きと意欲的に学び続ける生徒の育成」 成就感を味わい、自己効力感が高まる指導と評価の一体化 研究の見通し(仮説) 身についた力の達成状況を把握できる適切な評価方法とそれに基づいた効果的指導を工夫することにより、課題を自らの手で解決できるようになり、一人一人の生徒が「わかった」「できた」「やればできる」という思いを味わい、学習が楽しくなることにより、学び続ける生徒が育つであろう。</p> <p>研究内容・方法 (研究のポイント) 「自ら学び続ける生徒」の育成に不可欠な要素として、次のことを押さえる。 ・生徒側の思い：成就感、満足感、自己効力感に注目する。 ・教師側の押さえ：生徒の思いを的確に把握するため、3つの評価をする。 (指導用評価、指導用評価、身についた力の評価)</p> <p>(方法) ・授業研究による仮説の検証 ・各教科での教材の価値研究、評価規準の作成 ・授業意識調査、分析、考察 ・授業診断アンケートの実施、集計、分析・考察 ・少人数指導の効果調査、統計的処理、分析(数学、英語)</p>
--------	---

平成15年度	<p>テーマ 「生き生きと意欲的に学び続ける生徒の育成」 成就感を味わい、自己効力感が高まる指導と評価の一体化 平成14年度の内容をさらに追究していく。</p> <p>仮説 身についた力の達成状況を把握できる適切な評価方法とそれに基づいた効果的指導を工夫することにより、課題を自らの手で解決できるようになり、一人一人の生徒が「わかった」「できた」「やればできる」という思いを味わい、学習が楽しくなることにより、学び続ける生徒が育つであろう。</p> <p>研究内容・方法 平成14年度の内容・方法をさらに追究していく。平成14年度の研究で課題となったことを研究の視点に加え追究を深める。</p> <p>個に応じた教材開発 ・習熟度を考慮に入れた教材(ワークシート等)の開発 ・指導用評価をより明確にするための教材開発</p> <p>学習形態の工夫 ・少人数制、習熟度別の導入：効果を統計的にデータとして残す(英語、数学) ・複線化した小集団での学習の推進</p> <p>自己評価の充実 ・授業終了毎に自己を振り返る(授業終了時又は宿題) ・単元毎の到達目標の提示及びそれに対する自己評価</p> <p>評価場面及び方法の研究 ・指導用評価の方法を共通理解する ・身に付いた力の評価及び、フィードバックの方法</p> <p>各教科年間指導計画の見直しと作成 ・昨年度のものを参考にし、新学習指導要領に基づく計画を作り、充実を図る。 ・絶対評価規準、基準の見直し</p>
--------	--

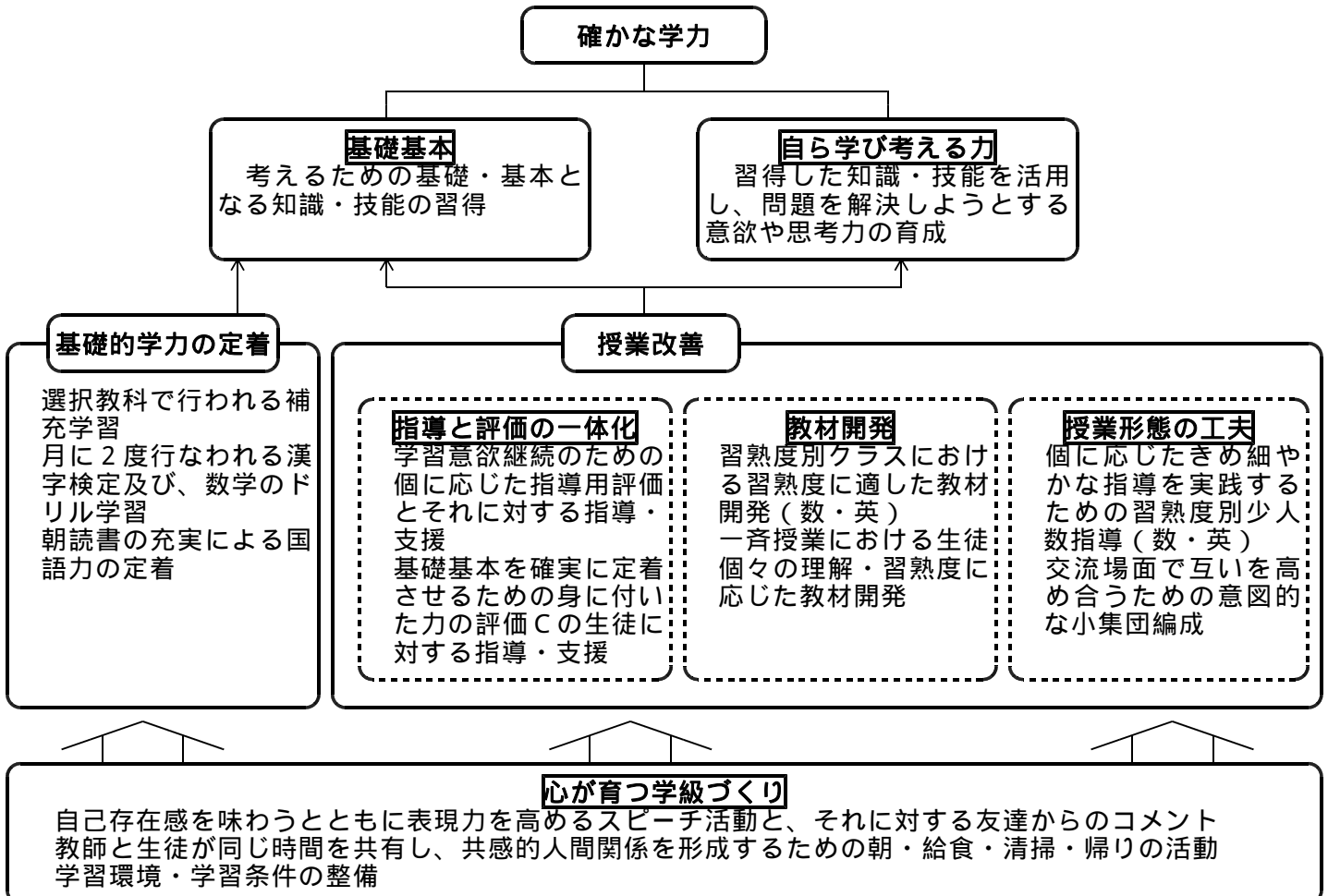
平成16年度	<p>テーマ 「生き生きと意欲的に学び続ける生徒の育成」 成就感を味わい、自己効力感が高まる指導と評価の一体化 「基礎・基本の確かな定着や学力向上」に関する視点が、明確に表現できるようにしたい。</p> <p>仮説 身についた力の達成状況を把握できる適切な評価方法とそれに基づいた効果的指導を工夫することにより、課題を自らの手で解決できるようになり、一人一人の生徒が「わかった」「できた」「やればできる」という思いを味わい、学習が楽しくなることにより、学び続ける生徒が育つであろう。</p> <p>研究内容・方法 平成15年度の内容・方法をさらに追究していく。平成15年度の研究で課題となったことを研究の視点に加え追究を深める。</p>
--------	--

(3) 研究推進体制

ア. 組織図



イ「学力向上フロンティア」の構想図



1 研究成果

- (1) 発展的な学習や補充的な学習など個に応じた指導のための教材開発について
習熟度別少人数クラス毎の難易度の異なる教材・ワークシートの開発
・基礎コースでは、操作活動（数学）や日本語（英語）を取り入れることにより、理解度が増すと共に、成就感を味わうことができる生徒が増えてきている。
一斉授業の中でのワークシートの工夫
・裏側に到達目標や、ヒントを書き入れておき、それを活用することで、授業の課題や追求方法が明確となる生徒が増えてきている。
学習意欲の継続を図ることのできる教材教具の開発
・教科書にない身近な教材の活用により興味関心が高まり、意欲的な生徒が増えてきている。
- (2) 個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫改善について

数学・英語における習熟度別少人数指導
・成就感が感じられるため理解度が増し、意欲的に授業に参加している。今年度は実施していない2年生の数学では、実施してほしいという要望が生徒・保護者から聞かれる。
・年度末にNRTを行い、そのデータから学力の推移を考察する予定であるが、今回は観点別の到達度の推移のデータから考察してみた。

<方法> 2年の3学期の成績と3年の2学期の成績から考察することとした。2年時に評価がCであった者の内、何%がBに、同様にBであった者の内何%がAになったかを算出し（小数点以下四捨五入）、表にまとめた。尚、「・」は「該当者なし」を意味している。

<結果>

数基礎	関	考	表	知
B A	7	・	・	・
C B	33	2	40	38

数中間	関	考	表	知
B A	25	0	4	1
C B	67	29	43	・

数発展	関	考	表	知
B A	45	20	0	28
C B	・	・	・	・

英基礎	コ	表	理	言
B A	5	・	・	・
C B	44	5	4	16

英中間	コ	表	理	言
B A	8	5	3	9
C B	80	66	58	46

英発展	コ	表	理	言
B A	29	22	36	67
C B	・	・	・	・

<考察> 数学、英語に共通して基礎コース、中間コースではCからBに上がっているパーセンテージが高い。また、発展コースではBからAに上がっているパーセンテージが高い。このことから、各コースの授業が、生徒の実態に即していることと、習熟度別少人数授業が有効に機能し、目的を達成していることがことが明確である。

- 一斉授業の中での複線化
・各自の追究課題や追究方法で授業を進められるため意欲の継続が計れるようになった。
追究課題や追究方法毎の意図的な小集団編成
・同じ思いで授業に臨んでいる小集団の中では交流場面で思考が深まるようになった。

- (3) 児童生徒の学力の評価を生かした指導の改善について
授業中の指導用評価（形成的評価）及び身に付いた力の評価
・確実に課題把握のできる生徒が増加し、1時間、意欲が継続する生徒が増えてきた。また、以前よりも多くの生徒が評価規準Bに到達することができるようになった。
身に付いた力の評価でCの生徒に対する支援
・その時間内で支援できなくても、宿題への添削や休み時間のふれあいの中で支援ができ、知識・理解が深まってきた。

- (4) その他
全校体制による朝読書への取り組み
・職員の打ち合わせを週一回にして、教師も共に取り組むことによって習慣化されてきた。
基礎的学力の充実（全校で漢字検定に取り組む・数学のドリル学習）
・検定日をいい機会ととらえ、漢字学習に自主的に取り組む生徒が増えてきた。
選択教科での補充的な学習
・習熟度の低い生徒にとっては再度行うことで理解が深まっている。

2 今後の課題

- (1) 発展的な学習や補充的な学習など個に応じた指導のための教材開発について
教師間の打ち合わせの時間確保が困難で、勤務時間終了後に行っている。
発展的な学習を位置付けるのが難しく、ともすると、進度の格差を助長する可能性がある。
到達目標を逸脱することなく教材を開発していくことが難しく、発展的な内容となることが多い。
- (2) 個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫改善について
基礎コースでは、少人数となっているが、他のコースでは少人数とは言えない。また、基礎コースでは習熟度の幅が広すぎて個別指導の必要性を感じる。
教材によっては必ずしも複線化できないし、かえって複雑になる場合もある。
授業時間内で小集団を編成し直すと時間的なロスが生まれる。数時間かけて課題を解決する場合には有効である。
- (3) 児童生徒の学力の評価を生かした指導の改善について
到達度の評価との関わりについての研究を深める必要がある。
生徒を個別に指導するための時間の確保がなければ、現状以上の指導が難しい。
- (4) その他
まだ、学習に対する成果は出ていないので、継続していく。
ドリル学習をする生徒の個別指導の時間の確保が難しい。

選択した教科が必ずしも補充が必要な教科ではない。また、発展的な学習を希望する生徒の欲求を満たすことができない。

・学力把握のための学校の取組について

年1回の学力調査・・・少人数指導の効果などを統計的に処理したデータにより考察する。
年5回の定期テスト・・・学期ごとの指導の効果などを統計的に処理したデータにより考察する。
小テスト・・・宿題（課題）やプリント学習の効果などをテスト結果により考察する。
少人数指導の効果を追跡調査するための基準問題を検討する。
年1回NRT・・・少人数指導の効果などを統計的に処理したデータにより考察する。

・フロンティアスクールとしての成果の普及について

1. 研究発表会（中間）を実施

日時 平成15年11月6日
場所 富士宮市立富士宮第四中学校
テーマ 研究主題「生き生きと意欲的に学び続ける生徒の育成」
－成就感を味わい、自己効力感が高まる指導と評価の一体化した授業－
対象 市内小、中学校及び周辺の市、町の教員、東部教育事務所指導主事
本校学校評議員、保護者、富士宮市教育委員、市議会議員、区長
民生児童委員など。

2. 少人数指導の効果についての 統計的データ処理結果
生徒及び保護者のアンケート実施と集約、分析資料等の提供。

提供先 東部教育事務所学力向上フロンティア研修会
県内外問い合わせ校

全国協議会（文部科学省）・栃木県葛生・田沼町教務主任者会・富士吉田市教員・
山梨県双葉中・埼玉県学力向上フロンティア研修会・裾野市中堅教員研修会・
岡山県津山市教育事務所次長・長野県佐久市教育委員・東京都港区教頭会・
栃木県真岡中・栃木県中川中・秋田県尾去沢中・福井県丸岡中・富士高等学校（学力
向上フロンティアハイスクール）

執筆 中等教育資料・第一法規・教職研修
取材 ベネッセコーポレーション

3. HP作成等について

富士宮第四中学校ホームページ上に、研究発表会のリーフレットとプレゼンテーションソフト
（パワーポイント）を使用して、研究の概要を紹介している。

（ <http://www.fujinomiya-shizuoka.ed.jp/jh-daiyon/> ）

次の項目ごとに、該当する個所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】 15年度からの新規校 14年度からの継続校

【学校規模】 3学級以下 4～6学級
7～9学級 10～12学級
13～15学級 16学級以上

【指導体制】 少人数指導 T・Tによる指導
その他

【研究教科】 国語 社会 数学 理科
 外国語 音楽 美術 技術・家庭
保健体育 その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 有 無